



### その時共和国へ動いた

うみぐみ(3歳児)の保育室に飛び込んだ時には、ちょうど担任が、絵本を読んでいる真つ最中でした。その日は、みんなで保育を観察する研究保育の日。

10人ほどの子どもたちが、熱心に聞き入っていたのですが、中には少し離れた場所ですぐ、中には少し離れた場所ですぐ、集団に背を向け、別の遊びに取り組んでいる子もいるようでした。するとその子は、手を止め顔をあげると、すつと立ち上がって、物語の声に引き寄せられるように、ススーッとその集団の後方、絵本の絵がよく見える位置に移動し、じつと話に聞き入っている様子でした。

目は手元の玩具に落ちていたように見えても、実は、耳と心は、絵本を囲む集まりの中にあつたのだと、この時にわかりました。

私たち大人は、子どもたちが集団で「なかよく」遊んだり、活動する姿を期待します。そして「なかよく」という言



葉の中に、「足並みを揃え、みんなと同じように行動してほしい」という思いを込めてしまいがちです。しかし、みんなと過ごす方法、集団活動への参加の仕方一つとっても、個性や段階、そしてその時々状況や気持ちで、様々な「あり方」があるものだと、学んだ一コマでした。また、それを認め合っていくクラスの間、霧囲気、それら個と集団の間を塩梅よく取り持つ、担任たちの働きかけに感じました。

木の部屋に移動してみると、そこには、うみぐみのもう一つのグループが、寒天を使ったゼリーを作っていました。これは、年間を通して楽しんでる「感触遊び」の中で、材料を混ぜ合わせることで、サラサラからドロドロへといった、「状態」が変化す



る面白さに気づいた子どもの声から、生まれた活動なのだそうです。

こういったモノの状態の「変化」が面白いと感じる背景には、それが何に生まれる変わるのかという「期待感」があるからで、これは、この先の未来を予想しようとする力とも言えます。つまりこの3〜4歳くらいから、時間の流れという感覚がはつきりしてくる、そして徐々にその中に我が身を置くようになっていくのです。



生きる姿です。

それに伴って、隣国との摩擦も増えるので、我が世の春もはや…と気づき始めるのもまた、この時期なのです。

不器用に、衝動的に、あちこちに気を散らしながら…大いに失敗も楽しんでいく。大らかに見守るほどに、他者とのぶつかり合いは増えていくのです。

「他者の中をくぐりながら、自分を磨いていく…それが3歳児」

午後のカンファレンス(意見交換会)で、印象的な表現を耳にしました。「ぶつかる」経験だけでよしとせず、その後の思いに最後まで寄り添い切る…それが



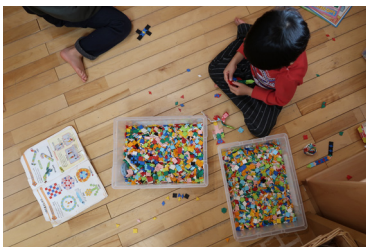
感じていくことは、人として安心感を持つて生きていくために、欠かせない力なのです。手渡されたまだ乾燥したカサカサの寒天を、思わず

「くぐらせる」ということ。傍に大人がいる意味は、そこにあるのだと思えました。

それに続く園庭漂いながら、ビールケースや板切れなど園庭に転がるガラクタで…一見無作為に、無造作に組み上げられた、大きな環状の構築物(表題部分の背景写真)。

このゴチャゴチャと積み上がった無秩序なオブジェに…均衡を感じるのはいかっこのよく見えるのは…心惹かれるのは…一体なぜなのでしょう。か。

園長 折井誠司



●編集 誠美保育園  
●発行人 折井 誠司  
●印刷所 誠美保育園  
●発行所 社会福祉法人 誠美福祉会  
〒192-0364 東京都八王子市南大沢5-1-2  
電話 042-6975-1155  
ファックス 042-677-5643  
E-mail sebi@nokuen.jp  
http://nokuen.jp/